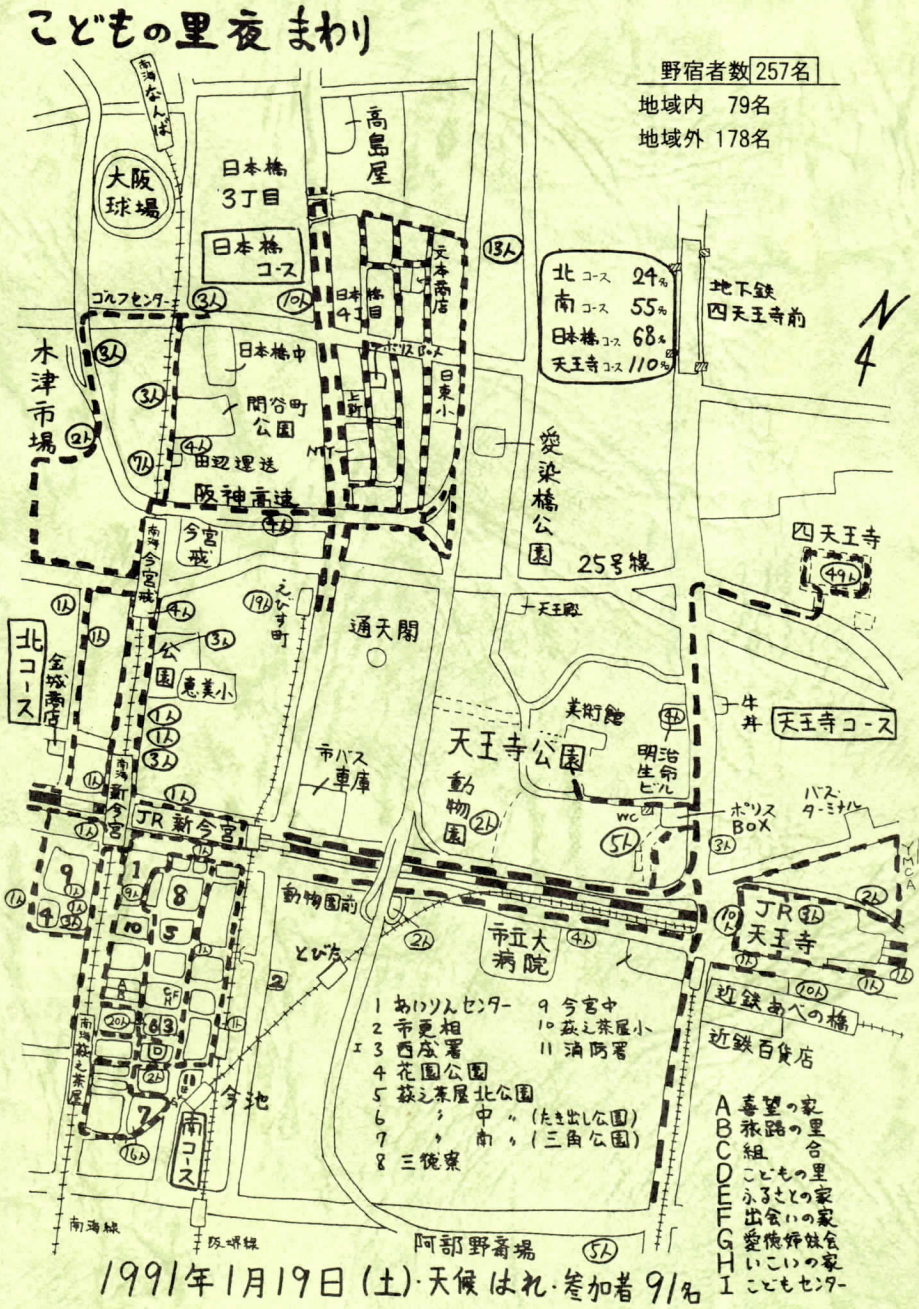
釜ケ崎一九九〇年度越冬

協友会通信21



図は1991年１月19日（土）の越冬こども夜まわり（こどもの里）記録の一部，夜まわりは，４コースに分れ，夜まわり学習会のあと午後10時から１時間ないし１時間半かけてまわる。南北コースは釜ケ崎地域。天王寺・日本橋コースは，阿倍野・天王寺・浪速の各地域。……は回ったコース。地図の中の㊅は野宿者数。参加者91人。（おとな51人，こども40人）

人生よありがとう

ビオレッタ・パラ作詞
（水野るり子訳）

人生よ　ありがとう　こんなにたくさんのものを
くれて
人生はくれた　二つの瞳を　それを開けば私ははっ
きり見分けられる
白と黒を
高い空の　星のきらめく奥底を
群衆の中から　私の愛するひとりの人を

人生よ　ありがとう　こんなにたくさんのものを
くれて
人生はくれた　聴くための耳を　それで私はゆっ
たりと夜も昼も聴きとっている
こおろぎを　カナリアを
ハンマーを　タービンを　犬の吠え声を　にわか
雨を
そして愛する人のやさしい声を

人生よ　ありがとう　こんなにたくさんのものを
くれて
人生はくれた　音を　アルファベットを　そして
言葉を
それで私は言い表わせる
母や　友や　兄弟のことを　そして私の愛する人
の魂の
道すじを照らす光のことを

人生よ　ありがとう　こんなにたくさんのものを
くれて
人生はくれた　この疲れた両足を
その足で私は歩き廻った
町や港を　海辺や砂漠を　山や野原を
そして　あなたの家　あなたの街　あなたの中庭
を

人生よ　ありがとう　こんなにたくさんのものを
くれて
人生はくれた　この心臓　それは私の胸をときめ
かせる
人間の知恵の果実を見るときに
悪から　そんなにも遠くへだたる善を見るときに
あなたの澄んだ目の奥底をのぞくときに

人生よ　ありがとう　こんなにたくさんのものを
くれて
人生はくれた　笑いと　涙とを
それで　私は見分けられる　嘆きと幸せとを
私の歌を形づくる　二つのものを
あなたたちの歌　それは私の歌
みんなの歌　それは私自身の歌
人生よ　ありがとう！

「人生よありがとう」は、一九九〇年度子ども夜まわりのテーマソングです。子ども夜まわりは、学習会のテーマに「アイヌ民族と釜ケ崎（寄せ場）―真実の出会を求めて」を選びました。一九九〇年夏、名古屋の寄せ場笹島でおきたアイヌ民族Tさんの事件がきっかけでした。このテーマにふさわしい歌をさがしていて、ビオレッタ・パラの作詞・作曲の「人生よありがとう」に出会いました。

ビオレッタ・パラ（一九一七―一九六七）は、チリのフォルクローレ歌手であると同時にチリの先住民（インデヘナ）マプチエ人のフォルクローレを採譜し、後世に残そうとした人です。チリのマプチエ人と北海道のアイヌ人。ここに共通点をみてテーマソングに選びました。夜まわりの期間（一九九一年一月～三月）、メルセデス・ソーサの歌で「人生よありがとう」を聴きました。

越冬闘争とペルシャ湾岸戦争

一九九〇年度の越冬闘争は沢山の人々の支援に助けられながらも重苦しい闘いであった。

三月十七日の越冬総括集会に配られた一枚の紙に誰しもがくぜんとする。「一九九〇年度越冬期行旅死亡者表（'90・12・1～'91・3・16）路上とドヤ内を合わせて五十五名の犠牲者。この死者の人数をどう受けとめればよいのだろうか。昨年も一昨年も行旅死亡者数は三十名。一度に犠牲者は倍増したのである。「名前不詳、年齢45歳～50歳、所持品ナシ、死因、推定凍死」の文字が痛ましい。

死者はなにも語ってくれない。原因を探っても推定に過ぎない。しかし湾岸戦争は越冬にも影響したと言って差し支えはないだろう。

今年のキリスト教協友会の越冬は丁度湾岸戦争にぶつかった。一月十一日、協友会の越冬開始。十七日湾岸戦争突入。日本中は多国籍軍援助の九十億ドルと自衛隊派遣の問題でふり回される。そして湾岸戦争の一応の終結をみた二月末日は越冬の最後の頃でもあった。

想像もつかないほどの多額の費用をつかい、ハイテクで装備された武器をふんだんに用いて事物を破壊し、人を殺した。そして戦争に勝利したと宣言し、この戦争は正義のためであったと公言する。しかし多額の費用をついやして何が残ったのだろう。問題は何ひとつ解決されていない。私たちは日本の九十億ドルが人殺しに用いられたことを決して忘れてはならない。私たちが忘れてもアラブの人々は決して忘れないだろう。

日本中が湾岸戦争に振り回されて「釜ケ崎どころではなく」なったとき、野宿を余儀なくされた労働者も「俺のことなんかほっといてくれ」とつぶやいた。事実夜回りをしていて「ほっといてくれ」という人が増えたことに気づく。「なんとかしてくれ」といわれてもなにかができるわけではない。しかし「ほっといてくれ」といわれると辛い。「ほっといてくれ」という人は本当は「ほっといて」ほしくない人なのだ。

今年の越冬で犠牲者が増えた。勿論、原因は湾岸戦争が全てではない。むしろ競争社会、力の社会を是認し、倒されたものを見向きもしない現代日本の社会構造に原因がある。

戦争をなりふり構わず力で乗り切り、「パックス・アメリカーナ（アメリカの平和＝力による解決）」が真理の如く騒がれ、日本がこれに追随するとき、「対話」は遠のき、その結果、弱い立場に置かれたものが更に捨てられて行くのだ。（N・S）

'90年度越冬報告目次

巻頭言❶　第21回釜ケ崎越冬活動を終えて❷　釜ケ崎越冬日録'90～'91❻　越冬期行旅死亡人表❽　行旅死者たちのこと⓬　協友会の20年⓰　書評「釜ケ崎の風」⓲　1・2　大和中央病院死亡事件について　私服警察官による性暴力を許さんぞ⓴　対談「アメリカのホームレス　吉岡基さん・田中豊さん」㉒　「えっとうだより」①～㊲　編集後記　協友会通信19㉜　協友会通信20㉞　募金のお礼㊱　新聞切抜き❺⓳㊲～㊸　㉛

●第21回釜ヶ崎越冬活動を終えて

日本社会の縮図・釜ヶ崎から

はじめに

第21回釜ヶ崎越冬活動も三月十七日の喜望の家での集会で一応の終わりとなりました。'90年は、協友会結成二十年であり、又、十月の暴動は、連日大きく報道され、新たなる偏見を生み出し、越冬期間中は、湾岸戦争という人殺しに世界中が熱中したのです。同じ時期釜ヶ崎では、五十五人もの行路死が出て、私たちも大きなショックでした。釜ヶ崎の様々な問題を一地域のことでなく、病む日本社会の縮図として多くの人々と共に考えてみたいと思います。

夜廻りと死・いのち

釜ヶ崎に生活しているから、夜廻りを毎週行っているからと言って野宿者の死に遭遇することは、ほとんどない。が、この冬、路上で三十三人、ドヤ（室内）で二十二人もの方が亡くなられていた。（8頁）例年よりはるかに多く、私たちも信じられなかったが事実であった。それも身元のわからない人だけでのことである。'89年度、西成区全域で千六百十四人が亡くなられている。（事故・自殺・病気……全死亡者）が、内六百名近くが釜ヶ崎の労働者なのです。路上で亡くなる人の五倍もの人が病院で亡くなられていることになります。この様に無念な死に方を私たちはどう考えるべきでしょうか。

私自身は、野宿することも、路上で死を迎えることも余りにもひどい病院の対応にある種の権利でもあるとの考えを持っていました。が、知ってる人の死を前に、会っておきたかった人、一言言っておきたかった人もあったであろうのに、一体どんな思いで……と考える。自分の周りには、常にだれかがついているし、又、いつも人々の中にいる自分にとって考えもつかない、悲しい最期ではないのか。野宿者への活動は、死と向き合っているだけにしんどいし、出口が見えず無力感に陥りやすい。この冬、一人の野宿者のお通夜と葬式が暁光会で野宿の仲間と家族、暁光会、夜廻りグループの参加の中で行われた。梅田駅近くで野宿している人であった。ガンの末期状態で初め入院を拒んでおられたが、夜廻りのメンバーと話しをする内にまかせますとのことで入院となり、家族にも連絡が出来たのである。この人の様に多くの人も、もう余り長くないけど家族に連

絡とってほしいとか、伝えてほしいこととかあったのではと思う。夜廻りもだし、日常の関わりの中でも毛布を渡したり、体の具合いを聞くことと同じく、そういったことの話せる関係になりたいものである。多くの人が亡くなったから問題が大きくなったのではない。ひとりひとりの無念の死を心に残しておきたい。

五年前から始まった、子どもの夜廻りでは、かわいそうとか、よいことをした、してあげたという段階から相手のしんどい、きびしい状況にふれ、自分自身も「心が痛む」「肝が痛い」との意味である日本語にない沖縄の言葉〝チムグルシー〟を知りました。それは、単に言葉を知っただけでなく、相手との関わり方を、自分の意識を変えることにもなっていったのでした。この冬の学習会は、アイヌの人々についてでした。彼らの自然の恵みの中に神を見ている生き方。アイヌ語のあいさつ「イランカラプテー」＝「あなたの心にそっと触れさせて下さい」日常のあいさつの中に相手への思いやりがにじみ出ているではありませんか。私たちの活動は、ともすれば自分たちの為の活動になっていないでしょうか。

今日の学習会は「キツネのチャランケ」という本の中の一部を勉強した。その中で一番印象にのこった言葉は、「川にいるさかなや山の実でも、すべての動物たちが、みんななかよくわけあって食べるものだから、けっして人間だけが食べるものと考えてはいけません」という文でした。うちは、これを「自然や土地は、すべての人間・動物達・植物達が（みんななかよくくらすために）あたえてくれているものだからけっして人間だけが生きてゆくためのものとは考えてはいけません

という文にもできる。日本人はそれなのに、アイヌの人達の土地をうばっている。もし、日本人がアイヌの人達みたいに、植物や動物達と話せたら、そんなやさしい心があれば……。うちは思う。本当は、アイヌの人達はうちらのできなかったこと、できないことを、やさしい心を、たくさんもっていたと思う。話しさえすれば解決できることをすぐ力で解決させようとする。そりゃあんたらは、うちらはどうなるの。植物は、動物は、いくら考えてもあんたらの考え方わからんわ。（あんたらとはブッシュ、フセイン、海部などのこと）キツネのチャランケで、魚というものは、アイヌばかりが食べる権利があるのでなく魚を食べて生きているそのほかの動物たちも食べれるようにと、神様があたえてくれた食料なのです。「それを知らないばかなアイヌがいて……」という文があるが、これを読むと、うちら日本人はもっと大バカだと思った。

今年の学習会は、うちらのぜんぜん知らない歴史や出来事を、日本のかくされたじったいをいっぱい知った。今日も知ったことがいっぱいあった。やっぱりこの世の中は、力の強いものがしはいしていくのだろうか。いくら心がこおっていても、やさしい心をなくしてしまった人でも、力の強い人達がこの世で一番強くなるのか。うちは、いくら弱くても心にぬくもり、やさしさがあればいいと思う。ぜったいに力だけではこの世の中がしはいできても人はしはいできないと思う。

（中2）

これらは、子ども夜廻り学習会の感想の一部です。

釜ケ崎暴動と湾岸戦争

十月、あれほど、新聞・テレビが取り上げた釜ケ崎暴動は、この地に、又、多くの人々に何を残したであろうか。すでに、何年も前の出来事かの如く話題になることも余りない。また、越冬期間中のニュースは湾岸戦争一色といってもよかった。遠く離れた場所での出来事を私たちの生活との関連で考えてみたい。

――西成署警官、暴力団から収賄――労働者の怒り――外からの少年たち――暴徒・無法地帯――。マスコミの報道の流れです。十一年振りの二十二回目の暴動、何人のケガ人と警察情報であり、背景・構造にふれていない。一千百万円と一万二千五百円。一人の警察官が手にしたワイロと日雇労働者が一日働いて得る賃金。実に八百八十日分である。一ヶ月二十日働いて（雨・病気・不景気……などで実働二十日は、しんどい）四年以上の金をゴルフに、車に、酒に、女に……使っていたという。労働者の怒りは当然ではなかろうか。又、少年たちの行為は犯罪であり法治国家では許されることではない……。海外派兵が国会で論じられている時期での法治国家論。そして今、掃海艇は、湾岸地域へと向かっている。

――戦争という人殺しがビジネスとされている現実。

――物や金が優先し命が軽んじられている社会。

――怒ることも、感動することも忘れた日本人。

――権力の犯罪に無知で寛容な日本人。

――「豊かさ」に疑問を感じない日本人。

――死・飢え、世界中の多くの人の苦しみを酒をのみながら語ることの出来る器用な日本人。

そこには、共に生きる、生かされている生活はない。

協友会、20年過ぎて

'70年十一月、カトリック、プロテスタント五団体で結成された協友会も現在では十の団体で構成され、当時とは比較にならない人々が、それぞれの施設でいろんな形で釜ケ崎に関わっている。が、街に、労働者ひとりひとりに明るい展望が見い出せず、反対に高齢化・孤立化が進み、増々、暗く、重いものにしているのが現実である。

当時、キリスト者として、日雇労働者に、釜ケ崎にどう関わっていくのか。賀川豊彦の貧民窟での働き、誤ち、コックスの「世俗都市」など学習からの出発であった。

今、労働者にとって協友会は、どういった存在であろうか。釜ケ崎もだが、キリスト教の福祉は、ひとりひとりの生活の自立にどの様に役立っているであろうか。構造上の悪に、不正義に闘ってきたであろうか。行政の下請けに甘んじているのではないだろうか。「善意」の押し付けではなかったろうか。……問われるべきことは、山とある。定められた場所である時間を「よい業」を行うことは、だれにでも出来るし容易なことではなかろうか。ひとりひとりの生と死にこだわり続けて生きたいものである。

最後に、この一年、二十年、多くの人との出会いを与えられ恐縮です。協友会がこの地で活動を続けることが出来るのも皆様方の暖かい支援があってなされています。今後とも私たちの小さな働きですが支えてくださる様お願い致します。

中島文雄

'91.2.14(9)　毎日

釜ヶ崎のキリスト者たち

協友会代表　中島文雄さんに聞く

日本最大の寄せ場労働者の町・釜ヶ崎（大阪市西成区）にカトリック、プロテスタントをはじめとするキリスト教各派のエキュメニカル（超教派）な集団「釜ヶ崎キリスト教協友会」が出来て二十年になり、このほど『釜ヶ崎の風』（風媒社・一五四五円）を記念出版した。キリスト者にとって釜ヶ崎とは何か、を中心に同協友会代表のカトリック信徒・中島文雄さん（四三）の話を聞いてみた。

（八木晃介記者）

キリスト者が釜ヶ崎に入ったのは一九三三年、カトリック・愛徳姉妹会のフランス人シスター三人が西成署裏の公園にセツルメントを開いて保育・医療・家庭訪問などの活動を開始したのが最初。戦後は福音ルーテル教会のドイツ人宣教師・ストロームさんが六四年に託児所を開設、やがて日本キリスト教団の金井愛明牧師、カトリック・フランシスコ会のハインリッヒ神父、愛徳姉妹会のシスターたちが集まり、ほぼ自然発生的にエキュメニカルな活動が始まり、七〇年にはカトリック、プロテスタント五団体で協友会が結成された（現在は十団体）。

「賀川豊彦の誤りを学ぶところから始めました」。賀川はせっかく被差別部落やスラムに入って貧しい人、抑圧された人を救済すべく宣教活動を続けたが、いかんせんその〝高み〟にたった位置ではそれらの人々から学ぶことができず、むしろ、しばしば差別的でさえあったことは、現在もすべてのキリスト者に重い課題を提出している。

「釜ヶ崎にいる神父も牧師もほとんど宣教しないし、受洗者も皆無じゃないでしょうか」。信者をつくることが目的ではなく、自分が信者として釜ヶ崎で働くことが目的だという共通理解があり、信者を増やすための社会福祉を拒否するという点でも一致しているという。愛徳姉妹会は労働者のための作業衣の修繕の店を開き、ルーテル教会の「希望の家」はアルコール問題への取り組みなどの地域サービス、日本キリスト教団「いこいの家」は玄米食を中心にした食生活改善運動、炊き出し支援活動を、という具合に各団体が独自に日雇い労働者とともに生きる道を深めている。

中島さんが所属する「旅路の里」はカトリック・イエズス会の施設で、協友会のセンターの役割を果たしつつ、越冬闘争支援、野宿者が路上強盗にあったりしないための夜間パトロールなどの活動を続けているが、「すべては後手々々で、これで労働者の側に立ちきっているとは恥ずかしくていえません」。

実際、この寒波の中で毎夜八十人が釜ヶ崎の地域内で野宿し、地域外では二百人に達する。この冬、すでに三十四人の野宿者が行路死してしまった。「みそ汁を一杯配ったからといって、状況総体がどうなるものでもない」との絶望感にかられながらも、逆に労働者から「ありがとう、あんたら風邪ひくなよ」などといたわられると「やはり、やめられませんよ。みんながキズをもっているから優しいんですね」。

かつて釜ヶ崎は「人情の街」だった。しかし、この国全体の流れを反映して、釜ヶ崎の人間関係もまた非常に希薄化している。かつてのドヤが冷暖房完備の個室型ホテルとなり、一人で弁当を食べてカップ酒を飲む。「労働者同士のケンカを止める人がいない、老人が強盗にあっていても見ぬふりをする、こんなことはかつてはなかったのですが」。けれども、自身日雇い労働に従事している中島さんは「他人に自分を飾ってみせる必要のない気楽さ」にひかれ、また「温かい部屋でテレビを見て酒を飲んで、世界の戦争や飢えを語れるような感性の衰弱」から免れるだけでも、「釜ヶ崎はまだ良い所」と感じている。

釜ヶ崎はいま猛烈な高齢化（五十歳以上が人口の六割を超えた）と住民の孤立化の波に洗われている。このような動向を正面から引き受けつつ釜ヶ崎のキリスト者たちは、抑圧された人々との共生の中に真の福音（正義・平和・喜び）を見いだす、文字どおりラディカルな日常を送っている。

力を通じて一致が与えられた証し

『釜ヶ崎の風』

釜ヶ崎キリスト教協友会編

風媒社

四六判322頁／1545円

釜ヶ崎越冬日録'90〜'91

一九九〇年

10月1日　国勢調査反対ビラまき
2日　釜ケ崎10月暴動
〜6日
3日　監視カメラ第1回公判
4日　西成警察署暴行事件公判
7日　協友会10月例会
9日　越冬小委員会
15日　10・2釜ケ崎救援会発足
17日　越冬小委員会
22日　天皇いらん西成区民の会ビラまき
28日　アジアンフレンド例会
31日　ストロームさん来日
11月4日　アジアンフェスティバル（於玉造神学院）
8日　協友会11月例会（11月より月2回例会となる）
9日　ストロームさん来釜歓迎会
天皇いらん西成区民の会ビラまき
10日　こどもの里運動会
11日　協友会20周年の集い
12日　天皇の即位礼に反対するデモ
三角公園〜ナンバ　参加二五〇〇名
14日　旅路の里友の会一泊旅行
18日　雑草講座（西宮朝鮮人強制連行の地下壕・主催雑草舎）にこどもの里合流遠足

23日　大嘗祭に反対する「大じょうぶ祭」と抗議デモ
25日　子供センターバザー
12月4日　越冬実会議
11日　越冬実会議
12日　越冬小委員会
監視カメラ第2回公判
13日　大和中央病院の医療ミス事件大阪地裁に提訴
15日　第21回越冬支援連帯集会
16日　協友会12月例会
17日　阪奈病院クリスマス訪問
18日　越冬実会議
21日　第21回越冬実大阪市民生局に申し入れ書提出
23日　協友会クリスマス会
24日　大和中央病院闘争実行委員会結成
子供センタークリスマス会
25日　第21回越冬突入集会　三〇〇名（於三角公園）
映画―沖縄戦・未来への証言
こどもの里クリスマス会
協友会20周年記念誌「釜ケ崎の風」発刊
26日　大和中央病院抗議集会（於市民館）
反弾圧学習会（主催越冬実）
子どももちつき大会（於三角公園）

27日　10月暴動公判
28日　大和中央病院抗議デモ　一〇〇名
29日　大阪市の越冬臨時宿泊所入所受付　六七六名希望二七名却下
～30日
31日　越冬ゼミ開始
～3日

一九九一年

1月1日　越冬まつり（のど自慢等）
2日　もちつき大会等
南港臨泊へ激励行動
人民パトロール中、西成警察私服による性差別発言
1／2西成署私服による性差別発言に対する抗議行動（於西成署前）
3日　ソフトボール大会等
4日　対大阪市・大阪府労働部抗議デモ
10日　越冬実越冬活動最終日
11日　協友会越冬夜まわり開始
13日　日雇全協総決起集会（於山谷）
20日　協友会1月例会
28日　大和中央病院医療ミス裁判第1回公判
2月3日　協友会2月例会
5日　天王寺公園有料化反対会議
10日　こどもの里キャンプ

～11日
17日　協友会2月例会
天王寺公園有料化反対行動（於天王寺公園正面）
18日　監視カメラ第3回公判
20日　天王寺公園有料化反対会議
24日　大和中央病院抗議行動
25日　学生キリスト者運動（SCM）会議
3月3日　協友会3月例会
4日　SCM現場研修
～12日
8日　監視カメラ第4回公判
9日　10・2救援会
13日　即位礼・大嘗祭違憲訴訟
17日　越冬のまとめとこれから（於喜望の家）
越冬小委員会
18日　大和中央病院医療ミス裁判第2回公判
20日　ドイツ民謡の夕（於三角公園）
21日　子供センター大バザー
27日　越冬小委員会
4月5日　監視カメラ第5回公判
14日　協友会合宿（於宝塚黙想の家）
～15日

釜ヶ崎地区　1990年度　越冬期

路上　33名

	名前	年齢	性	遺留金品	発見日時
1	不詳	40~45	男	現金26円, メガネ, 腕時計6個, ガラスレンズ	1990. 12. 2 AM 6:35
2	不詳	40~50	〃	現金720円, 診療依頼書, ライター, タバコ	12. 5 AM 6:00
3	不詳	60~70	〃	一万円紙幣が半分に切れたもの. 入歯 印鑑. 印鑑入れ	12.13 AM 2:36
4	不詳	45~55	〃	百円ライター	12.17 AM 4:15
5	不詳	50~60	〃	現金3円. 爪切	12.17 AM 7:47
6	※宇佐美 正時	47	〃	現金530円	12.24 PM 2:22
7	不詳	55~65	〃	現金2081円	12.25 AM 7:16
8	不詳	50	〃	現金1160円. 栓抜き2個. ライター3個. 剃刀	12.27 PM 10:10
9	不詳	30~50	〃		1991. 1. 7 PM 10:15
10	不詳	50	〃	現金230円, ライター	1. 8 PM 8:30
11	不詳	45~55	〃		1.13 AM 7:08
√12	不詳	55~65	女	現金1220円	1.23 PM 8:07
13	不詳	30~40	男	現金420円, 財布, 鍵 2個	1.26 AM 6:30
14	※新垣 全康	48	〃	現金368円. 雇用保険日雇労働被保険者手帳. 腕時計. 懐中電灯. メガネ. 印鑑	1.26 AM 7:25
15	不詳	50~60	〃		2. 2 AM 7:20
16	※橋本 道昭	50	〃	腕時計, 糖尿病手帳	2. 3 AM 6:45
17	不詳	50~60	〃	現金2022円, 小銭入. 鍵3個, コイン	1. 30 AM 5:30
√18	不詳	55~65	〃	現金7360円, 紺色背広上衣, 紺色作業服上衣, ズボン. ジャージ下衣. 上衣. 長ぐつ	1. 30 PM 1:23
√19	不詳	60~70	〃	現金36111円, 腕時計. 印鑑. メモ紙 新幹線特急券3枚. タバコ. ライター	2. 4 AM 9:55
20	不詳	50~60	〃	現金67370円. 指輪. 腕時計. 眼鏡. 鍵	2.17 PM 4:30
21	不詳	60	〃	現金55円, 腕時計	2.19 PM 2:50
22	不詳	40~50	〃	現金640円	2.21 AM 6:35
23	不詳	45~55	〃	現金810円. ライター	2.22 PM 9:31
24	不詳	45~50	〃		2.23 PM 8:30
25	不詳	60	〃		2.25 AM 7:00
26	不詳	50	〃	現金390円	2.25 AM 8:35
27	※池田 勝	47	〃		2.25 PM 8:10
28	不詳	35~45	〃	現金3385円. ライター. 爪切り	3. 1 AM 0:55
√29	不詳	50~60	〃		3. 1 PM 4:00

行旅死亡人表 （'90.12.1～'91.3.16）

発見場所	死亡日時（推定）	場所	死因	処置
太子1-1-11 先路上	1990.12.2 AM5:00頃	同上	不詳（検索中）	北
萩之茶屋2-4 萩之茶屋中公園内	12.4 PM10:00頃	〃	脳内出血兼硬膜下血	〃
山王3-12-8 先路上	12.13 AM3:04（確認）	杏林記念病院	中枢神経機能障害	瓜破
太子1-15-17 愛隣会館前歩道上	12.16 PM10:00頃	同上	不詳（検索中）	北
萩之茶屋2-9-2 市民会館前路上	12.17 AM0:00頃	〃	不詳（検索中）	北
萩之茶屋1-10-7 矢野酒店前路上	12.24 PM1:00頃	〃	急性肝炎	北
萩之茶屋3-5-38 南海電鉄萩之茶屋駅改札口前自転車置場	12.25 AM5:00頃	〃	凍死	北
萩之茶屋1-3-44 あいりん総合センター南側路上	12.27 PM8:00頃	〃	心不全	北
萩之茶屋2-4 萩之茶屋中公園	1991.1.7 PM10:20頃	〃	焼死	瓜破
萩之茶屋2-7-18 ホテル「愛和」前路上	1.8 AM8:00頃	〃	凍死	北
山王2-14-2 トヒアツネマ前歩道上	1.13 AM0:00頃	〃	急性心不全	北
天下茶屋1-27-15 南海本線萩之茶屋1号踏切	1.23 PM8:00頃	〃	外傷性ショック	瓜破
萩之茶屋2-4 萩之茶屋中公園南出入口横	1.25 PM10:00頃	〃	不詳 検索中	北
萩之茶屋2-9-1 西成市民館東出入口前	1.26 AM6:00頃	〃	頭がい骨骨折兼脳腫脹	北
萩之茶屋1-2-8 みきた食堂南側歩道上	2.2 AM2:00頃	〃	急性心不全	北
天下茶屋北2-5-20 先路上	2.2 PM9:00頃	〃	不詳検索中	北
花園北2-11-18 ネオコーポ花園町1F出入口大和中央病院横	1.30 AM5:00	〃	凍死	北
山王2-14-10 萬盛湯浴槽内	1.30 PM0:50頃	〃	窒息	北
山王3-8-11 「ポパイ」西側敷地内	2.4 AM0:00頃	〃	心筋硬塞	北
天下茶屋1-18-24 杏林病院前	2.17 PM4:25	〃	失血	瓜破
萩之茶屋1-9-14 自彊館三徳寮事務所受付前	2.19 PM2:30	〃	肺結核	北
太子1-15-17 大阪市立更生相談所前路上	2.21 AM0.00頃	〃	凍死	瓜破
萩之茶屋1-3-44 あいりんセンター西側路上	2.22 PM7:00頃	〃	凍死（疑い）	北
萩之茶屋1-3-44 医療センター前路上	2.23 PM0:00頃	〃	凍死（疑い）	北
萩之茶屋2-5-23 先路上	2.25 AM0:00頃	〃	凍死（推定）	瓜破
萩之茶屋2-9-1 大阪市立西成市民館玄関	2.25 AM0:00頃	〃	凍死（推定）	瓜破
萩之茶屋1-3-44 あいりん総合センター南側リフター前	2.25 PM7:00前後	〃	出血性ショック	瓜破
萩之茶屋1-3-44 あいりん総合センター南側	3.1 AM0:00頃	〃	不詳（検索中）	北
萩之茶屋3-2-3 ホテル松竹屋上洗濯場	2.25	〃	窒息死（首吊自殺）	瓜破

ドヤ（室内）　22名

	名前	年齢	性	遺留金品	発見日時
1	※中村	40～50	男	現金8150円，定期入れ，腕時計	1990.12.13 AM11:28
2	※久保	60	〃	現金735円．腕時計．財布	12.18 AM 9:15
3	※佐藤	40～50	〃	現金430円．ライター，引換券．白色蓋	12.20 AM 9:26
4	※玉垣	60	〃		12.23 AM 8:09
5	※稲澤浩二	50	〃	現金5650円，財布，腕時計，カバン．日雇労働者手帳，健康保険日雇特例手帳求職受付票	12.29 AM 2:40
6	※岩本	45～55	〃	現金28110円，腕時計．求職受付票 日雇労働被保険者手帳	12.30 AM 9:20
7	※佐藤敬二	50	〃	現金2476円，財布，腕時計，印鑑．バッグ．日雇労働者手帳，健康保険手帳．受給資格者票，宝くじ40枚	12.31 PM 10:53
8	※福島建三	39	〃	現金5740円，腕時計．鍵，百円ライター	1991. 7. 8 PM 9:20
9	※江南秋春	75	〃	現金6106円，小銭入，腕時計3個，ケース入印鑑．健康手帳，医療受給者証，国民健康保険証，紙片	1.21 PM 9:30
10	※中町宏一 ことに鶴野敏夫	55	〃	現金32173円，時計，望遠鏡，ラジオ・カセット，貯金通帳．印鑑9本	1.22 PM 6:54
11	※田端勝治	59	〃	現金340円，小銭入れ，腕時計，日雇手帳，求職受付票，診察券．印鑑2個	1.29 AM 9:15
12	※小川なつ	60～70	女	現金3210円，財布，腕時計	1.31 PM 5:26
13	※吉田一	66	男	現金97000円．財布．鍵．腕時計	2.4 AM10:05
14	※田中	60～70	〃	現金370円．腕時計．印鑑．メモ帳．紙片	2.6 AM 9:15
15	※山田	50～55	〃		2.13 AM 8:55
16	※舟部義臣	48	〃	現金49960円．腕時計．財布．ライター	2.20 AM 9:21
17	※西村英一	57	〃	現金800円．腕時計．紙片	2.24 PM 10:05
18	※小川重二郎	46	〃		3.5 AM 5:30
19	※岸井正	66	〃	現金17700円．ライター．腕時計．タバコ	3.5 AM 6:35
20	※林定治	45～55	〃	現金1640円．腕時計	3.6 PM 7:30
21	※森田浩	50～55	〃	現金2520円．小銭入れ．腕時計	3.6 PM 8:32
22	不詳	45～55	〃	現金220円	3.16 PM 2:50

路上のつづき

30	不詳	50～60	男		3.2 AM 5:20
31	不詳	45～50	〃		3.10 AM 3:20
32	不詳	40～50	〃		3.11 AM 5:22
✓33	不詳	50～60	〃	現金862円．腕時計．鍵	3.16 PM 1:23

※ 自称

発見場所	死亡日時（推定）	場所	死因	処置
荻窪2-6-11 ホテル日章 39号上段	1990.12.11	同上	急性心不全	風破
荻窪2-1-18 ホテル愛和 11号室	12.18 AM0:00頃	〃	高血圧性心疾患	北
太子1-2-11 ホテルみかど 311号	12.20 AM3:00頃	〃	窒息	風破
荻窪1-13-13 ホテル水都 13号	12.23 AM7:40頃	〃	両肺大葉性肺炎疑い	北
太子1-7-2 新富荘 松の部屋	12.29 AM5:00頃	〃	右硬膜下血腫	北
荻窪2-7-23 ホワイトハウス 230号	12.28 PM11:00頃	〃	肝硬変（推定）	風破
荻窪2-5-22 ホテル一番 102号	12.31 PM3:00頃	〃	出血性ショック	風破
荻窪1-12-3 錦アパート 1階A2	1991.1.8 PM8:30頃	〃	窒息	風破
荻窪1-14-5 ホテルみよし 222号	1.20 PM10:00頃	〃	急性心筋梗塞	北
荻窪2-9-13 マンション ウィアリー川辺 407号	1月初旬頃	〃	高度腐敗せる為不詳	風破
荻窪1-12-26 サニサイド アネックス 611号	1.29 AM0:00頃	〃	虚血性心疾患	北
荻窪2-10-24 ハイツアイリス 41号	1.30 PM0:00頃	〃	脳出血（脳室内穿破）	北
太子1-13-29 坂口アパート 1階	2.4 AM5:00頃	〃	肝硬変	風破
荻窪1-12-4 緑風荘 306号	2.6 AM8:00頃	〃	窒息	風破
太子1-3-6 日の出ホテル 618号	2.10（推定）	〃	虚血性心疾患	北
荻窪2-8-22「未盛」エレベーター内	2.20 AM0:00頃	〃	大葉性肺炎	北
荻窪1-4-16 ホテル末広 314号	2.17頃（推定）	〃	肺結核症（推定）	風破
荻窪2-2-16 ホテル和香	3.5 AM0:30頃	〃	骨盤骨折（墜落転落）	風破
荻窪1-8-16 かなめ旅館 1階廊下	3.5 AM0:00頃	〃	急性心不全	風破
荻窪3-6-33 山田マンション2 201号	3.6 AM11:00頃	〃	虚血性心疾患	風破
荻窪1-4-16 ホテル末広 311号	3.3頃（推定）	〃	（吐物誤嚥による）窒息	風破
荻窪1-13-17 新日の丸ホテル 1階廊下	3.16 PM2:00頃	〃	急性硬膜下血腫	北
荻窪1-3-44 医療センター南側軒下	3.2 AM0:00頃	同上	不詳（検索中）	北
荻窪2-4 荻窪中公園	3.9 PM0:00頃	〃	不詳（検索中）	北
荻窪1-3-44 医療センター南側路上	3.11 AM0:00頃	〃	不詳（検索中）	北
太子1-6-12 地下鉄倉荘線 動物園前駅上り線路内	3.16 PM1:05	〃	頭部損傷	風破

行旅死者たちのこと

こども夜まわりのまとめにも当たる「この冬に亡くなった人を思い出し霊を慰めよう会」に出席して、三つのことを報告しておきたいと思います。

⚜

一つは、三月中旬の出来事です。

「ねーはん、大変や大変や。」とさけびながらこどもの里に飛び込んで来た子どもについて行くと、四角公園でおじさんが上半身火だるまになってころげまわっていました。他のおじさんが一人だけ、他の服で必死に火を消しながら、「誰か救急車呼んだれや!」とさけんでいました。

四角公園の真中に丸いベンチがあります。その丸いベンチの目の前の、しかも真昼間の出来事でした。そして、そのベンチには少なくとも五人程のおじさんたちが座って、黙ってその様子を見ていました。確かに見ていました。

私は、こどもの里に帰ってすぐ救急車を呼びました。救急車が来た時、燃えていたおじさんの服はもうなく上半身真赤にずるむけになって、おじさんは自分で救急車まで歩いて来ました。

今年、行旅死亡の死因の中に初めて「焼死」というのを見つけました。この三月中旬の事件を、私も慰霊の会の中で子どもたちに伝えました。

その翌日と後日、子どもたちから、二回、同じ報告がありました。そのどちらもが、もっとおそろしい内容でした。それは、あるおじさんが、他のおじさんを燃やすという報告でした。作文にその子がこう書いています。

「今日（三月三十一日）公園でおじいちゃんの足におじいちゃんに（他のおじさんが）火をつけました。」（小2・まさゆき）

そして、その子たちがどうしたか作文には書いていません。この出来事を興奮しながら話してくれた時、この続きを次の様に話していました。

「それでな、おれらな、『何してんねん』言うて、おじいちゃんの足の火消したんや」

「どうやって?」

「そこらへんにあったもんでたたいてや。」

「まわりに他のおっちゃんもおらんかったんか?」

「おったで。おったけど知らん顔しとった。」と。

私は、小学校二年生と三年生の二人の子どもたちに、よくぞやった!と思いました。

けれど、このことは、作文には書かず、子どもは次の様に続けているのです。

「公園でいこうとしたら花がありませんでした（三月三十日の慰霊の会の花）。市民館には何で花が（置いて）あるんですか。ほんだら何で公園には、なんで花がないんですか。」

子どもの感性は鋭いです。実は、慰霊の行進を四角公園から始めました。四角公園で今年四人の方が亡くなっておられ、四つの花束を公園中央フェンスぞいに並べ置いたのです。そして、三時間の行進を終え帰って来た時、すでに四角公園に置いた花も位牌も一つも残っていなかったのです。こんなことは、この四年間一度もなかったことです。

このことが、子どもたちにとって、自分たちがおじいちゃんの足の火を消したことよりも重大な出来事だったということです。子どもたちは、おじいちゃんの足に火をつけたことと、花がなくなっていることと関係があることを見ぬいているのです。

四角公園で亡くなった四人の死因について記しておきます。一人は焼死、一人は脳内出血兼クモ膜下出血、そして他の二人は、死因不詳で検索中とあります。

もしかしたら、三月中旬上半身を焼いてい

た人も誰かに火をつけられたのかもしれません。その一部始終を周りの人が見ていて知らぬふりをしていたのかもしれまん。

知らぬふりをする。なぜでしょう。自分は関わりたくないから……。釜ケ崎にも、日本の他人への無関心と自分さえよければ良いという価値観の波が押し寄せて来ているようです。釜ケ崎は、いま、あちこちにある金融屋と、おうへいな外車の駐車や警笛を鳴らしっぱなしの外車の往来が目につくにつれ変わりつつあります。

⚜

二つめは、四角公園で花をそえ祈っていたすぐ側の西成警察のへいに、雨に打たれ意識もなくなっているおじいさんが一人横たわっていたことです。皆が見守る中、救急隊が来て眼を見て意識を確かめていましたが、全く反応なし。担架に乗せられ、杏林記念病院に運ばれて行きました。

杏林病院の前でも亡くなった人がおられたので皆で祈った後、数人で病院の中に入り、四角公園のおじいさんがどうなったか聞きました。名前を言えるまで意識は回復していないが何とか助かるだろうということでした。

死の寸前のおじいさんの保護を目の前にして、子どもたちは行旅死とはどういうものか自分のこととして捕らえました。

「まわる時に一人のおっちゃんが雨のふる中でたおれていました。私はこんなになって死んでいくのだなと思いました。もし私がこのおじさんだったらたすけられていたのか、不安でした。」（小4・かおり）と書いています。

余談ですが、病院に寄った時のことを小学三年生の子が次のように書いています。

「と中でなんかびょういんの前にいたかんごふさんが『いらっしゃい、いらっしゃい』といっていました。とてもへんでした。」（知子）

⚜

三つめは、死の寸前のおじいさんとの出会いによって、行旅死の場所が、意外にも自分たちが最もよく知っている、よく通っている所であるということに、子ども自身がびっくりする程気付いたことです。

「一番おどろいたというよりなんか、しんじられへんかったのは、自分の家のとなりの所でおっちゃんが死んどったこと。なんで、いつもとおってる道やのに、いつも見てる所やのに気づかんかってんやろ……。ほかにも、私の知ってる道、知ってる所でたくさんの人らが死んでいってしまった。ほんましんじられへん。」（小6・としえ）

「なんで何回も通った道で死んだのが気づかないのかわかりません。だけど、花をおきにいってよかった。」（小4・みつよし）

行旅死亡人表を見て気付かれると思います。路上で亡くなられた三十三名の内二十一名の六四％の人が、あいりん総合センター・医療センター（七名）、四角公園・西成市民館（七名）、私立更生相談所・自彊館・病院前（大和中央・杏林）・駅（七名）で死んでいるのです。

私たちがよくよく知っていると言うより、酔いつぶれ、倒れ寝ている人をよく見かけ、横目で見ながら通りすぎてしまっている所なのです。

行旅死亡の場所が、ほとんど私たちの見慣れた所に多くあるのは、私たちがやっぱり、倒れ寝ている人の姿に慣れてしまっているからかもしれません。

五年続けて子ども夜まわりに参加した子どもが、今年はもう社会人となって、次の様につづって、私たち大人に反省を迫っています。

「花を持って沢山でまわる慰霊になれてしまう。ここでは何人の人が亡くなって、花をそえて、黙祈をして次の場所へ、人が死ぬことには慣れたくない。鈍くなりたくない。」

五回の子ども夜まわりと四回の慰霊の会。大人は慣れのようになってしまいます。けれど、子どもにとってはそうではないようです。慣れてしまったように見えても、あそび半分であるように見えても、本当にそうであっても、子どもは何かを吸収し、何かを心に感じ取っていることを今年も教えられました。

A．行旅死亡人数

年度 / 年代	1987年			1988年			1989年			1990年		
	人数	割合		人数	割合		人数	割合		人数	割合	
総数	172			150			?			?		
内身許不明者	110			100			81			124		
越冬期	30	27%		33	33%		30	37%		55	46%	
12．1～12．31	2	1.8	7%	8	8	24%	8	9.8	27%	15	12	27%
1．1～1．31	12	11	40	15	15	45	10	12	33	13	10.5	24
2．1～2．29	12	11	40	9	9	27	11	13.5	37	16	13	29
3．1～3．16	4	3.6	13	1	1	3	1	1.2	3	11	9	20

B．年　齢

年度 / 年代	1987年		1988年		1989年		1990年	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
30代	1	3%	2	7%	1	3%	3	5%
40代	11	37%	12	43%	10	33%	14	25%
50代	15	50%	10	36%	12	40%	24	44%
60代	2	7%	4	14%	5	17%	13	24%
70代	1	3%	0	0	2	7%	1	2%
平均年齢	51.7		49.5		52.7		52.7	

D．死　因

年度 / 死因		1987年		1988年		1989年		1990年	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
病気		15	50%	18	64%	22	73%	23	42%
凍死		5	17%			2	7%	8	15%
栄養失調				1	3.6				
シノギなど	出血	3	10%	1	3.6			4	7%
	不詳	6	20%	2	7%	5	17%	10	18%
自殺		1	3%	2	7%	1	3%	4	7%
中毒				1	3.6				
窒息								5	9%
焼死								1	2%

C．発見場所

年　　度	1987年			1988年			1989年			1990年		
発見場所	人数	ドヤ	路上	人数	ドヤ	路上	人数	ドヤ	路上	人数	ドヤ	路上
萩之茶屋１丁目	17	5	12	9	6	3	12	9	3	19	9	10
〃　２丁目	3	1	2	9	6	3	8	4	4	17	8	9
〃　３丁目	2	0	2	4	0	4	6	4	2	3	1	2
太　子１丁目	2	1	1	2	1	1	1	1	0	8	4	4
〃　２丁目	1	1	0				2	1	1			
花園北１丁目				2	1	1						
〃　２丁目	3	0	3							1	0	1
山　王１丁目												
〃　２丁目										2	0	2
〃　３丁目				1	0	1				2	0	2
北津守１丁目	1	0	1									
天下茶屋北１丁目				1	1	0	1	1	0			
〃　２丁目	1	0	1							1	0	1
天下茶屋１丁目										2	0	2
合　　計	30	8	22	28	15	13	30	19	11	55	22	33
割　　合		27%	73%		54%	46%		63%	37%		40%	60%

萩之茶屋１丁目・２丁目・３丁目とその他地区との比較

場所＼年度		1987年		1988年		1989年		1990年	
萩之茶屋	１丁目	73%	57%	79%	32%	87%	40%	71%	35%
	２丁目		10%		32%		27%		31%
	３丁目		7%		14%		20%		5%
その他（太子・山王・花園北・天下茶屋など）		27%		21%		13%		29%	

20周年記念集会から

協友会の20年

一九九〇年は釜ケ崎キリスト教協友会が結成されて二十年になりました。これを機会に折々に出された今迄の報告書や資料を一冊の本にまとめ、〝釜ケ崎の風〟が発刊されました。また十一月二十三日には約百名の仲間と共に〝これからの釜ケ崎〟と題してシンポジウムを開催、二十年間の活動の反省とこれからの歩みについてお互いの思いを確認しあう記念集会と、感謝をこめてささやかなパーティがもたれました。

一九七一年、協友会は釜ケ崎で働く五つのキリスト教エキュメニカルグループで結成され、その手始めの共同活動は栄養高い朝食を日雇仕事に出かける労働者たちに提供する食堂の経営でした。

一九七五年の年末年始の一週間、大阪市の依頼をうけて臨時宿泊所を開設、ドヤに泊まれない労働者に住と食のサービスをしました。またそれにひき続いて、西成の花園公園にテントを設営し、殊の外厳しい寒さだった七五年の冬を労働者たちと越冬していた釜ケ崎日雇労働組合の活動を支援しました。それが協友会が越冬支援活動に参加する始まりで、今年で十六回目になります。

少しずつ協友会の参加グループも増え、現在は十のグループが子どものことから老人のことまで、アルコール、医療、労働と様々の分野にわたって取り組んでいます。また釜ケ崎の問題に関心を持つ人が増加し、日本全国、北海道から沖縄まで本当に多勢

の方々が私たち釜ケ崎キリスト教協友会の活動を理解し支援下さっており、心よりうれしく、力強く思います。

しかし、協友会が二十年を祝った同じ一九九〇年の秋に釜ケ崎は荒れました。いわゆる〝釜ケ崎の暴動〟として新聞やテレビに連日大きく報道された事件です。これは常日頃から人権が軽視され、権力による抑圧の重みに苦しむ釜ケ崎労働者たちが、一つの出来事が導火線となって爆発し、はげしい抗議行動となって西成警察署と対立した事件です。私たちはこの事件を警察や行政にだけ向けられた彼等の怒りと片付けてはならないと思います。ゆがめられた現在の社会構造そのものに対しての抗議です。「人を人として」をスローガンに取り組んでいる釜ケ崎キリスト教協友会の二十年の働きにも向けられていると思います。私たちは本当に彼等の苦しみや痛みを自分の痛みとして苦しみ共有して来たのでしょうか？ ともすれば福祉的発想、即ち「お世話してあげる」「支援してあげる」的かかわりを先行して来たのではないかと強く反省します。

二〇周年記念集会の開会礼拝の中で日本キリスト教団のK牧師は協友会がエキュメニカルグループとして互いのちがいを乗り越え、力をあわせて、地域のため、労働者の側に立って彼等の権利のために働く目的で結成された当時の申し合わせ書を紹介、二十年後の今日もその基本姿勢にそって、今、何に取り組まねばならないかをしっかり見据えて働く事の大切さを強調されました。

シンポジウムは協友会メンバーがパネラーになって発題しました。

Yさんは一年間のアメリカの無料宿泊所での体験を若者の鋭い感性で、Sさんは管理教育、管理社会の蝕まれている心を歎き、釜ケ崎の子どもの持っているすばらしいものを大切に育みたいとのべられました。

H神父は福音的価値観に基づいた神との出会いの場、社会をかえていくエネルギー源である「荒野」の釜ケ崎で連帯して生きようとする我々のあるべき姿を。K牧師は「釜ケ崎暴動」はいつでも「物よこせ」のためでなく、人を人として扱えという人権闘争である。人間の生き方、在り方を敏感に感じている釜ケ崎の人権を我々はつぶしているのか、それとも共に働いているのだろうか？ と問いかけられました。

このシンポジウムを通して〝これからの釜ケ崎〟で共に生きていこうとする私たち釜ケ崎キリスト教協友会の姿勢が明確にされたように感じました。十分の設備のある施設や食事の保障がそこで過ごすアメリカのホームレス達に怒ること、考えることを失わせている現実を伝えてくれたYさんの言葉にもあるように、我々は決して人をつぶす運動をしてはなりません。何を考え、何を大切にしないといけないかをしっかり見つめ、労働者から学ばしてもらいながら、次の二十年に向けての歩みを続けたいと思います。

終わりにこの集会に協友会結成の時から共に働いたハインリッヒ神父は都合つかず、とうとう出席して頂けませんでしたが、ルーテル教会のストロームさんはドイツからわざわざそのために来日し、参加下さったことを報告し、心より感謝したいと思います。

（文責　村上喜久子）

協力を通じて一致が与えられた証し

『釜ヶ崎の風』

釜ヶ崎キリスト教協友会編

風媒社

四六判322頁／1545円

私と釜ケ崎の日雇労働者との出会いは一九七四年の冬に遡ります。当時大学四年生で、その冬釜ケ崎キリスト教協友会が、大阪市の下請けで簡易宿泊所の日雇労働者のお世話をした時のメンバーの一人でした。

簡易宿泊所とは日常、土木・建築作業、回収業等いわゆる三キ（危険で、汚く、嫌われる）労働に従事する日雇労働者の仕事が減る年末年始、ドヤ（宿）に宿泊出来なくなった人々のために一時的に行われる極めて不十分な行政による越冬対策です。

しかし行政の対策は越冬期に限らず、多くの日雇労働者に青カン（野宿の意味で青空簡易宿泊の略）を強いてゆくのです。釜ケ崎では年間約百名程の人々が行路病死すると言われています。

私が働いた宿泊所では連日、日雇労働者の組合の団交が繰り返される一方、その要求を力でねじ伏せようとする機動隊が常時待機していました。日雇労働者の衣食住に関わる中で、「どこに立っているのか」という問いかけは日増しに強くなってきました。

協友会は翌年から独自に、日雇労働者の支援活動を展開し始めます。その時の体験で知った日雇労働者の構造的、必然的に作られる劣悪な労働状況や生活状態、またその他様々な厳しい現実、しかしその中でも逞しく、優しく生きている側面に触れ、私の信仰の在り方は根底から問われてきました。

この本は日本最大の日雇労働者の街釜ケ崎で、日雇労働者と共に歩みを続ける釜ケ崎キリスト教協友会の二十年間の営みからのメッセージ集です。

創立時から大切にされてきた「労働者の側に立ち、命を守り、エキュメニカル（超教派的）な活動」であることが随所に語られています。そして、一つ一つの文章は重たく、鋭く日本社会の一人一人とキリスト者に問いかけます。

数年前、カトリック信徒宣教者会とエキュメニカル組織「ゴーバルの会」から派遣され家族と共にネパールの村で過ごした経験から、小柳伸顕氏の「西洋型ミッションを問う」は大いに共感を覚え、協友会の活動は西洋型ミッションを超えていると思いました。

なぜなら、子どもを含めどの執筆者も自分の持っているものを教化したり、押しつけたりせず、日雇労働者との出会いによって自らが変えられたことを伝えているからです。

従って金井愛明氏は「聞くことを大事にしてください」と言われ、ハインリッヒ神父さんとストロームさんは、自国の教会体制の中で容易に理解されない体験をされる。また薄田神父さんと本田神父さんは聖書の読みが深められたことから福音をとらえる視点を与えてくださっています。

そして、他の活動者を含め各々の活動は、前島宗甫氏の言われるように「弱い立場と共にあることへの祈りが協力を生みだし、その協力を通じて一致が支えられてきた」とするエキュメニカルな活動なのでした。

日雇労働者の平井正治氏の「博覧会から見た釜ケ崎の歴史」、また、もう一人の日雇労働者・水野阿修羅氏の「アジアからの労働者と釜ケ崎」は釜ケ崎の労働者の歴史と日本社会の推移を生きた歴史として記しておられ、貴重な視点を与えられます。

子ども夜回りの子ども達の文章には日雇労働者との交流の中に「命」からかけ離れた現在の管理教育に対する問いかけを感じざるを得ません。

これらの文章から吹き出す豊かな風が多くの人に触れることを、心から祈るものです。

中島　淳（滋賀・近江兄弟社高校聖書科専任講師）（「信徒の友」五月号より）

日経 '90.12.30

宗派超えた「あいりん」20年

釜ヶ崎キリスト教協友会が記念出版

生活相談通じた「共感」つづる

日雇い労働者の町、大阪・西成区のあいりん地区で、キリスト教関係者が宗派を超えた救援組織「釜ケ崎キリスト教協友会」を結成してから満二十年。これを記念して同会はこのほど「釜ケ崎の風」（風媒社刊、一、五四五円）という本を出版した。越冬夜まわり（夜間、グループで回って、野宿者に対して医療や生活相談を行う活動）を通じての体験や感想、労働者の生活実態などが、牧師、司祭、施設職員、住民の労働者、高校生ら二十四人によってつづられている。同会は、この出版を新たな出発点として、活動の輪をさらに広げていく考えだ。

出版された「釜ケ崎の風」

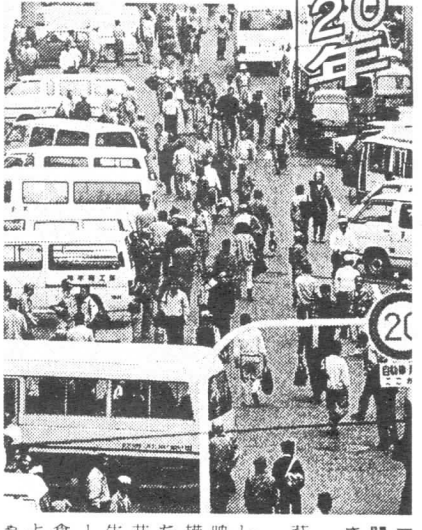
同地区にキリスト教関係者が入ったのは、一九三〇年代にさかのぼるが、戦後、六〇年代ごろから相次いで生活・医療相談所や老人向け食堂、作業衣修繕店、保育所などが開設され、エイズ会、日本福音ルーテル教会、日本キリスト教団など九カトリック、プロテスタントの十団体が拠点を設け、日曜日に礼拝をする一方、夜まわりや断酒指導、娯楽会の開催、対行政交渉などの活動を展開。継続的にかかわっているボランティアは数百人にのぼるという。

各団体が宗派を超えて連絡しながら取り組む目的で、七〇年十一月に協友会が発足。二十周年を記念した今回の出版は、これまでの活動の報告書や資料を整理したり、地区について考える学習会・セミナーのテープをおこして編集した。

主な内容は、夜まわりに参加の野宿者排除に反対する活動を中心とした「〝おっちゃん〟たちは労働者や」など。労働者の高齢化や孤立化が進む同地区の現状を、福祉の対象と見るのでなく、共感することの大切さを訴えている。

さらに、クリスチャンとしてこの地区で活動する意味を問う「福音への挑戦」のほか、三十年近く前から同地区で過ごして来たフランシスコ会のハインリッヒ・シュヌーゼンベルク神父（現在は長野県在住）と、ルーテル教会のエリザベート・ストローム宣教師（現在はドイツに帰国）の対談「釜ケ崎に生きて」を収録している。

編集に当たった同会代表の中島文雄さん（42）は、自らも同地区に住むカトリックの日雇い労働者。「信仰は既成の道徳や儀式を守っていくというだけのものではないはず。人が人として尊重されるために、自分がどう生きていくのか、現実と闘い、学ぶ中から、福音がもたらされると思う」と話している。



マイクロバスの間を行き交う職さがしの労働者（大阪・西成区萩の茶屋で）

〜〜〜〜〜

した子供の目に映った労働者を描いた「〝おっちゃん〟たちと共に生きる」、生活相談室のケースワーカーや食堂経営者らによる「〝おっちゃん〟たちの健康を考える」、天王寺公園から